

## 自省的なフィールドワーク論

調査における当事者性について

岩谷洋史（国立民族学博物館 文化資源研究センター 機関研究員）

### 1 はじめに：対象としての「文化」概念

「文化」という概念を用いることに大きな躊躇いがある。その理由は、客観的な事実として確定することが難しいという観察上の問題によるということよりも、むしろ、後述するように、この概念は、ある種のポリティクスのなかに埋め込まれたものであるということが大きい。

レイモンド・ウィリアムズは、以下のように「文化」概念を整理している。

#### ①理想としての文化

文化は普遍的な価値による人間の完成、あるいは、理想化された究極目標である（ほとんど教養という意味に近い。日本語でいうところの「カルチャー」）。この場合の研究スタイルは、研究対象（文学、芸術、芸能）の中に価値を見いだし、それについて記述すること。文学研究者や文芸評論家などの活動などがそれにあたる。

※当然のことながら、そうでないものとそうであるものとにわかれる。具体的には、目に見える形の公共的な建物になっていく。

#### ②記録としての文化

文化は、人間の知性と創造力の結果の所産である。人間の思考や体験が記録されている。この場合、実証主義的な方法にもとづく分析がなされる。多くの研究者は、特定のトピックを選択し、それ以外の事象との連関の中で実証的な証拠を見いだし、説明しようとする。

#### ③社会生活のあり方としての文化

記録の一種であるが、現在の生活している人の観察を中心にして、それらの特定の生活のあり方を記したものが文化である。したがって、文化とは人間が作り出したものだけでなく、日常／非日常におけるさまざまな制度や行動の中に現れることになる。

※いわゆる、19世紀のタイラーが定義する ギアツのように意味を紡ぎだす生成システムという定義の仕方もある。

3番目の定義（以下、「文化」と表す）が、私も慣れ親しんでいる人類学における伝統的かつ基本的な定義である。研究者は、生活の中からさまざまな事象を客観的に記述、分析する。「文化」の違いは、生活の違いに現れるので、さまざまな「文化」を記録することに専念し、それらを様々な観点から分析することになる。

この「文化」概念は、カルチュラルスタディーズにも借用された（と理解しています）。しかしながら、後述するように、現在では、徹底的に批判の対象となっていることも事実である。「文化」を生活の観点から記述することから、経験的に生活の違いは多様に観察されるため、それらの違いを本質化して決定的な違いとする傾向があるからである（いわゆる、文化の有機体的モデルで本質主義）。典型的な言い方は、「〇〇文化」という名詞で概念化することである。これは、リアリティを単一のものへと収斂していく方法でもある。

とりわけ問題として考えたいのは、①と③の定義なのであるが、そもそもある事象を「文化」として対象化した際に、それについて語るのはどういう立場にたった誰なのか？このことに関して、人類学の立場から考えてみたい。問題なのは、何が「文化」になるのかではなくて、何を「文化」として定義、あるいは再定義しようとしているのかその行為そのものなのである。

なお、人類学が対象とするものは、単数形の文化ではなく、複数形の「文化」である。この発想が可能になったのは19世紀の終わり頃である。したがって、人類学的な知の営みが可能となるのも19世紀終わり頃からになる。①の定義は文化をどちらかといって単数形で考える方法で、文化の度合いが低いか高いかという話にかかわる。

## 2 フィールドワークという方法

「文化」を科学的に研究する方法として、フィールドワークがとられる。近年では、フィールドワークは、人類学だけでなく、社会学、歴史学、心理学など、人文・社会諸科学では、珍しいものではなくなっている。人類学は、このフィールドワークによって、「他者」（自分とは異なる生活世界に生きている人たち。したがって、調査者は必然的に外部者の立場が求められる）を調査する。

### 2. 1 フィールドワークという方法の確立

人類学では、19世紀の人類学者たちは、「安楽椅子の人類学者」と名付けられた。これはフ

フィールドワークの必要性が20世紀になってから求められたからである。現在では、人類学ではフィールドワークが学問的なアイデンティティを確立するための必要不可欠な方法となっている。その一方で、社会学などでも、シカゴ学派の都市研究に代表されるように、フィールドワークが重要視される。

(例) マリノフスキー『西太平洋の遠洋航海者』(1922年)、ゾーボー『ゴールド・コーストとスラム』(1929年)、アンダーソン『ホーボー—ホームレスの人たちの社会学』(1923年) カルチュラルスタディーズ、ウイリス『ハマータウンの野郎ども』などなど。

フィールドワークが重視されるのは、日常生活に対する関心であり、その場の意味を問う。したがって、エスノグラフィカルな記述が重視される。また、対象となる人びと、当事者の視点(イーミックな視点)の理解や当事者の語りを重視する(ほとんど当事者になる一歩手前ぐらいまで)。

人類学、社会学、あるいはカルチュラルスタディーズにおいて、フィールドワークが行われるが、基本的に行っていることにはあまり大差はないという印象がある。しかし、ある人類学者は、「カルチュラルスタディーズとは違う」とか、「人類学のフィールドワークは長期に渡る」といった発言が見られる。要は、ギアツの言葉を借りるならば、「厚い記述」に至っていないということなのである。

## 2. 2 人類学者のなかでよく言われるフィールドワークのテクニク

### ①基本姿勢

例えば、「みずから現場に身を置き、体験、観察するなかで、直感や感性を磨く」というようなことがよく言われる。

### ②調査論点

「書を捨て野に出よう！」的な発想はよくないという立場の人たちや、なるべく「本を読まずにすぐにフィールドワークへ行こう」という立場の人たちがいる。一方は「頭でっかち」と非難し、一方は「肉体派」といって揶揄するが、とりあえず、関連書物を読んで、課題と作業仮説を設定して、そのうえで、フィールドワークを試みるというのが一般的に言われていることである。

### ③調査にでかける

自分の立場によってまったく異なった接し方をされる（年齢、所属、性別など）が、先方への承諾が必要。電話や手紙で直接、指導教官を介してなどなど。

### ④調査方法

定量的方法というよりは、質的方法が重視される。参与観察をしつつ、聞き取りなどを行う。

インフォーマントの質（芋づる式にインフォーマントをみつける）。フィールドの人たちの規則・慣習。人びとの相互作用・関係性。当事者の考え方、意味づけ。現場で立ち現れる問題点などなどを見いだす。

### ⑤フィールドノートや記録機器

- ・フィールドでのメモ帳。現地を離れたら、その日のうちにノートブックに書き込む。
- ・カメラ撮影。カメラ撮影については、カメラ撮影をしていいのかどうかを尋ねる。撮影した写真は、ファイル名をつけて整理していく。
- ・ビデオカメラによる撮影。撮影方法（定点観察など）。「わたしは撮影している」と周囲に知らせるような態度をとる。
- ・レコーダーによる録音。録音方法に注意。当然、録音時に相手に許可を得る。

### ⑥注意点

先方とアポイントメントをとって、時間を守る。開始時に、自分の名前を告げ（もしくは、自分の名刺を渡す）、元気よく挨拶をする。終了時に挨拶をして帰る。明るい態度・学ぶ姿勢。信頼関係とプライバシーの尊重。活動組織のルールを尊重。自分の立場と役割の把握。事前の準備と状況に即応できる柔軟さ。

## 3 どのようにして対象について語るのか？：他者との境界を設定する行為

### 3. 1 対象を表象する際の語り方：本質主義

従来、人類学者が対象である「文化」を語る際、本質主義的になっていた。アルジュン・アパデュライは次のように述べる。

問題の多くは、物質的であれ形而上学的であれ、名詞の文化がある種の対象、事象あるいは実体という意味を含みもつことにかかわっている。このような実体化は、もともとは文化が

打破すべき対象だとされていた人種という観念の言説空間へと文化を引き戻すように思われる。名詞の《文化》は、何らかの精神的実体という意味をとまなう。そのため、それが特権視する共有化や合意形成、境界設定は、知識が不均等で、望ましいとされる生活様式も多岐にわたっている、という事実と真っ向から対立するように思われる。さらに、名詞の《文化》によって、周縁化された者たちや被支配者層の世界観、ならびに行為性への注視が妨げられるようにも思われる。[アパデュライ 2004: 35]

例えば、P に特定の間人集団名、Q に文化が充足されると、「どこどこの集団はこうこうこういう文化です」という言い方になる。対象を科学的に定義しようとする、こういう言い方にならざるをない。具体的に記せば、以下のようなありふれた表現になるだろう。

ほとんどのイギリス系アメリカ人にとって犬は愛玩動物である。この関係は、イギリス系アメリカ人と大人と子どもの関係に似ている。ペットの犬は、叱られ、甘やかされ、愛されて飼われている。一方イロンゴット族は犬を狩猟に役に立つ動物と考えている。イロンゴット族の男が愛犬に怪我をさせた場合、その犬にはなんの愛情もみせない。それに対して、イロンゴット族は、子豚が病気になった時には、甘い声でささやき、優しく抱きしめ、愛情のこもった赤ちゃん言葉であやす。この点のみていくとイギリス系アメリカ人のペット観は、イロンゴットと犬の関係よりもイロンゴットと豚の関係のほうにより当てはまるように思われる。[ロザルド 1998]

このような語りは、「本質主義」と呼ばれる。これは、「真正性」(authenticity)の問題とからまってくる。調査者は、意識しているか無意識なのかは別にして想定したうえで、何が文化の「真正性」なのかを探し求めた。

#### ■「真正性」の語られ方と批判

- ① 調査データから、「〇〇文化」と単純に語ってしまう。個々の具体的な調査データから抽象、および一般化してしまう。
- ② 流動化する世界で現在の文化的な状況は、変化してしまった状況だとする。「歴史」を想定し、過去の元の「文化」を復元しようと試みる。インフォーマントは必然的に年配の人たちになっていく。サルベージ型の研究。
- ③ 現在は変化してしまったという嘆きの語り。現在の状況＝元々の文化状況＋外的影響。

極端に言うならば、現在の文化的な状況は、まがい物なのである。つまり、本当の〇〇文化

ではないということになる。まさに、クリフォードが言うところの「消滅の語り」である。

### 3. 2 当事者たちの語り方：例えば、戦略的本質主義

オセアニアを研究対象にする人類学者であるロジャー・キージングが、「伝統は創造されるものだ」という議論のもと、政治的アリーナで用いられる伝統概念は、もともとあった村落などにおける真正な伝統に比べて非真正である。」といわゆる「伝統の創造」論を展開した際に、現地の人類学者であるハウナニ＝ケイ・トラスクは、「文化を語る権利があるのは、文化の担い手である。」と批判をした。

これは代表＝表象行為が決して、外部の人類学者だけではないということを表明しているのであるが、このような批判は次の論理にたっているだろう

ある事象において当事者であるとする。例えば〇〇であるということは、〇〇であることで受ける様々な経験を生きているという意味で、当事者となる。この経験は、その当事者間では、説明抜きに共有することができるが、〇〇でない人間には、そうした説明抜きのコミュニケーションは出来ない。当事者の経験は、その事象における当事者のグループ内では説明抜きに共有できるが、当事者以外には伝わらない。当事者と非当事者の間には、壁があるのだ。

上記のような論理展開が適用されるのは、対抗言説が生み出されるときにしばしばである。結局のところ、本質的アイデンティティが必要なのは、カテゴリーによって差別や周縁化されたりしている社会的なマイノリティが、差別している側である支配的マジョリティに押し付けられたカテゴリーを引き受けることで、そのカテゴリーに属する他の人びとと異議申し立てをすることができるからであり、また、そのマイナスの価値を刻印された本質を肯定的なものへと変えることによって、マイナスの価値を押されていた自己を肯定できるようになるからである。

実際のところ、当事者たちが自分たちの「文化」をうまく語るができるのかと言えばそれについても疑問を持たざるを得ない。なぜならば、しかし、差別的なマジョリティに対して、対抗言説を繰り出せるようになったときには、主体の変容が起こっていると考えることができるから、当事者自身による言説でさえ、当事者のリアリティをすべて表現することはできない。語れるようになったときには、当事者ではなくなっているからである。

### 3. 3 いろいろな「文化」の語り方

まとめると、調査する人たち（研究者）は、従来、研究対象の「真正性」をもとめていった。そして、現在でも、形はかわるものの、そうした態度はいくらでも目撃することができる。例えば、デジタルアーカイブを構築するという目的はその典型である。

逆に、調査される側の当事者の人たちも、自分たちの「真正性」を求める、あるいは、語ることがしばしばある。調査者も調査される人も同じような論理を共有しているのである。しかも、複雑なのは、調査対象の人たちが自分たちの文化を保証するものとして、外部の研究者の研究に依拠する場合も多い。そういう意味では、研究者は、フィールドでの透明的な存在では決してないのである。

ポストコロニアルの議論が普及した現在の主流の人類学においては、こうした「消滅の語り」になんとか陥らないようにするというのが基本的なスタンスになっている（成功しているかどうかは別にして）。リアリティが単一なものに収斂していくものではないという考え方も大きくなっている。

## 4 おわらない終わり：とはいうものの・・・。

従来、そして、現在でも人類学における調査対象は、基本的に「他者」（自分とは生活世界を異にする人びと）である。例えば、文字通りの「異文化」、国内で調査する場合は、「サブカルチャー」、「マイノリティ」などなどに焦点があたる。それは何らかの成員性の存在する集団やコミュニティである。逆に言うならば、確固としたかたまりのない人々の集まりに対しては、評判がよくない（とらえにくいということ）。これらについては、とりわけ上記で定義されるような「文化」をもっていると仮定されてきた。逆にその仮定によって、研究対象となるのである。

そうした「文化」をフィールドワークによって、浮き彫りにしていくわけであるが、フィールドワークとは、一般的に全人格的な融即の場を形成するものであり、一人の独特の自我をもった個人が、一回きりの経験として他者の集団に入るものであると説明される。そして、エスノグラフィーは、一人の経験した個人が生産した所在があきらかな著作物なのである。

エスノグラフィーにまとめる際、伝統的には、フィールドワークのプロセスを記載することは少ない。しかし、人類学者が、公式非公式の場において、フィールドワークの体験を語る際、武勇伝的なストーリーになる場合が多い。例えば、「いかに私は苦難を乗り越えて、ある一定の目標を達することができたのか」、もしくは、「私は脅威の体験をもって、フィールドワークに身を投じたのである」、「私と現地の人たちとの出会い」などなどである。要するに、始まりが

あり、終わりがあるのである。まさにそういう意味でストーリーである。

もちろん、このような単線的な語りは、ポストコロニアル理論が広まった現在となつては、批判の対象となるのである。実際には、このような語り方する機会は多々としてある（近年出版されているフィールドワーク本など）（こういうふうにはしか言えないからかもしれないが）。

こうした語り方は、対象である現地の人たちに対する「愛」を表現したものである一方で（人類学者の間では、対象となる人たちに対する「愛」がよく語られる）、悪く言うならば、自己の正統性、あるいは、このアカデミック共同体、もしくは対象を物象化することを維持する言説を垣間みることができるストーリーを形成しているかもしれない。

しかし、本当に、フィールドワークにおいて、当事者と出会ったと言えるのか、対象をとらえることができていたのか。フィールドに入るといっているのは何を意味しているのか。当事者や対象は常に非在だったのではないだろうか。こうした問いかけをしたとたん、「文化」を調査する人たちのフィールドワークに関する言説（物語といっても過言ではない）やその成果物であるエスノグラフィーの記述に関して疑問を持たざるを得ないのである。

「長期にわたって」（これが特に強調される）現場で私は見た、聞いた、触れ合ったなどなど、調査者を主体とする経験的なことが語られる。それらが対象である事象を記述することへの自信へとつながっていくことはよくわかる。しかしながら、このフィールドワークの物語が逆に、人類学が批判的にとらえてきた「代表＝表象」の仕組みを暗に示すこともしばしばである。

#### 【参考文献】

アパデュライ, アルジュン. 2004年 『さまよえる近代-グローバル化の文化研究』 門田健一訳 平凡社

ウィリアムズ, R. 1983年 「文化の分析」『長い革命』若松繁信・妹尾剛光・長谷川光昭訳、pp.43-69、ミネルヴァ書房、1983年 [Williams, Raymond. 1965. The Analysis of Culture. in "The Long Revolution," pp.57-88. London: Penguin Books ]

クリフォード, ジェイムズ. 2003年 『文化の窮状—二十世紀の民族誌、文学、芸術』 太田好信訳 人文書院.

クリフォード, ジェイムズ. 2004年 『人類学の周縁から—対談集』 星埜 守之 訳 人文書院. [Clifford, James. 2003 On the Edges of Anthropology(Interviews), Prickly Paradigm Press.]

ロザルド, レナート. 1998年 『文化と真実—社会分析の再構築』 椎名美智訳 日本エディタースクール出版部